

2015 年度
博士論文

主査		小川敦生教授
副査		中村隆夫教授
副査	東京藝術大学	中林忠良名誉教授
指導教員		渡辺達正教授

日本における銅版画の「メティエ」

— 1960 年以降の日本現代銅版画表現のひろがりからの考察 —

多摩美術大学大学院美術研究科

大矢雅章

日本における現代銅版画史は、明治末期に始まった創作版画の流れの中で、個々の作家達が手探りで西洋銅版画を研究した結果、1950年代以降世界に認められる表現を多々生み出し、現在に続いている。日本の銅版画作品が世界の国々で評価されたのは、ヨーロッパの伝統に裏打ちされた表現とは異なる、オリジナリティーが見られるからである。戦後まもなく、1951年サンパウロ・ビエンナーレで駒井哲郎の《東の間の幻影》が日本人賞を、また1956年ルガノ国際版画ビエンナーレでは浜田知明の《初年兵哀歌（歩哨）》が8人賞を受賞。日本で開催された東京国際版画ビエンナーレに出品された、池田満寿夫、加納光於、浜口陽三などの作品にはヨーロッパの伝統にない表現が見て取れる。深沢幸雄は独学でありながら幅広い技法を生み出し、後の銅版画に多大な影響を与えている。

これらの作家は、日本における現代銅版画の第一世代と呼ばれ、日本の銅版画表現を大きく牽引し、他に類を見ない魅力的なマチエールに支えられている作品を生み出した。個性的な作品が続々と登場した背景には、銅版画技術の習得を独学で行った作家が多かったことが理由のひとつであると推察される。そのためヨーロッパのような伝統に裏打ちされた表現とは異なったものが生み出されたのだろう。銅版画は作家のもつイメージを、腐蝕などを使った技術を用いて再現することで、独特の質感の表現を可能にする技法である。魅力あるマチエールを出すには、頭の中のイメージを忠実に再現できる高い技術力を持っていなければならない。絵画全般において、このような表現の土台となる専門技術の習得をフランス語で「メティエ」（*métier*）という。「メティエ」は一般的には「職業」、また美術用語では「習熟すべき技術」となっている。600年近い銅版画の歴史を持っているヨーロッパでは、銅版画の「メティエ」は培われた技術と捉えることが出来る。

しかし、このようなヨーロッパの場合と異なり、日本における銅版画制作の技術とは、作家の思考や感情を形にするために試行錯誤の上習得された、いわば作家独自の方法論だったと推察する。このような作家の内面を形にするために、習得された「メティエ」は作家そのものを表すような「マチエール」を早くから生み出すことに繋がり、結果的に、作家ならではの表現として、世界で高く評価されることになったのではないだろうか。

本論では以上の推察に基づき、日本における銅版画表現のオリジナリティーはどこに、いかなる形で見出されるのかについて、具体的に駒井哲郎、加納光於、深沢幸雄の実例をも挙げながら見ていくこととする。各作家による銅版画の表現が、その作家ならではのもの、即ちオリジナルのものであるためには、それがその表現の土台となる唯一無二の「メティエ」を有していることが不可欠の条件であると言えるだろう。その論証をするために、3人の作家による作品のオリジナリティーを検証しながら、同時に自己の作品についても見ていく。筆者の制作の根幹となる“内なる思い”「生々流転」について、その概念の意味するところを客観的かつ哲学的に確かめつつ、自作に現れる「メティエ」

を導きだし、結果として自作のオリジナリティーとはいかなるものなのかについてその具体化を試みる。